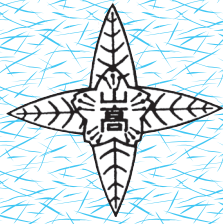


第78号

編集・発行 山形大学山形高等学校
 図書部
 図書委員会

発行日
 令和5年2月15日

(株)大風印刷



日大山形

図書館報



読書のすすめ

校長 中園 健 二

例えば、ソクラテスのことを知りたいと思えば、直接ソクラテスに会って、自身の口から話を聞くのが一番です。それが無理ならば、彼をよく知る人から情報を得るのがいい。しかし、いずれの方法も無理であることは周知のことです。「過去のこと」を現代の人間が知るためには、過去の何者かが、過去の言語によって書き記した「書物」という媒体を「読書」という方法で読み解くしかありません。勿論、過去という時間の束は一様ではありませんが、それは今は大きな問題ではありません。

そもそも、「書物を読む」という行為は、先に書き記した人の体験を、後の人が「追体験する」ということです。しかしながら、世界一周した人の体験を読書によって追体験したとしても、それで読んだ人が実際に世界を一周したことはありません。それでも、「行つたような気持ち」にはなれるのです。それが大事です。その人はまだ見ぬ世界のことを知り、「いつかは自分も世界一周をしよう」という希望を抱くことでしよう。

科学の書物を読んだ人は、自分も将来科学者になろうと決心するかもしれませんが、英雄の伝記を追体験した人は、そこから勇気を得ることでしよう。読書の意義とはそういう「人生の道しるべ」のようなものを得ることなのです。私はみなさんにとって「人生の道しるべ」となるような書物と出会い、素晴らしい感動を味わい、今後の人生の糧としてほしいと願っています。

そこで、みなさんに二冊の書物を紹介したいと思います。一冊目は私が若い頃に読んだ『ゾウの時間 ネズミの時間』(本川達雄著)という本です。

著者の本川氏は東京工業大学で生物学を担当されているのですが、私はこの書物と出会い、多種多様な動物の「生命」というものの不思議に感銘を受けました。つまり、動物によって「時間」というものがそれぞれ違うということを知り、大変興味を持ったのです。本川氏の研究によれば、

「…動物の寿命は体長に比例する。心臓が一回ドキンと打つ「心周期」は、ヒトが一秒、ネズミは〇・一秒、ネコ〇・三秒、ウマが二秒で、ゾウだと三秒…。哺乳類の心臓は十五億回で止

まる。つまりネズミの寿命は二年、ゾウは七十年、ヒトは二十六・三年だそうだが…。だからと言ってネズミとゾウの生きた時間の感覚は変わらない。ところで、ヒトの寿命は生物学的には二十六・三年だが、現代人はその何倍も長生きをする。それは安定した食料供給、安全な都市や医療の発達等が飛躍的に人間を長寿化させたからだ。ゾウが入歯菌を使えば百年は長生きするという…。」

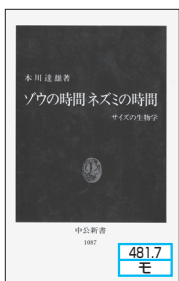
私はこの書物を読んで、この世の中は何と不思議に満ち溢れているのだろうか、つくづく思い知りました。それと同時に、自分に与えられた「時間」というものが何とかけがえないものなのだろうかと改めて認識することができました。

また、最近「声」を出して読みたい日本語(齋藤孝著)を読む機会がありました。

江戸時代の学習法の一つに「素読(そどく)」という方法がありました。早朝、生徒が師匠の元に集まり、皆で「四書五経」を朗読するというものです。取り立ててその意味を解釈するわけではなく、書いてある文字を大きな声で読み上げるだけですが、『論語』や『孟子』など「四書五経」の素読を繰り返すことよって、言葉が身体に馴染み、脳を活性化させる効果もあったのだろうと考えられます。

「聡明」という言葉の、「聡」は「よく聞くこと」を意味し、「明」は「よく読み、よく見ること」を指します。つまり、聡明な人間を育てるために素読はよい訓練にもなったというわけです。

古今東西、人は知恵や知識などの「情報」を頼りに、便利や利得を追求します。その際「読書」はとても有効な手段です。青少年期は好奇心や知識欲が旺盛であり、また情熱的で感動の心を豊かに持っています。「鉄は熱いうちに打て」という言葉があるように、この時期にこそ積極的に良書を多読し、多くの先人の貴重な体験を「追体験」し、「自己形成」、「自己鍛錬」をはかり、知的財産をたくさん形成してください。



481.7
モ



809.4
サ

本校には3巻まで所蔵があります。

私の読書道

第23回

「鏡」にまつわる話

教諭 森谷 翔(国語)

私が生徒の皆さんに紹介したいのは、村上春樹の短編小説『鏡』だ。この作品は、「僕」と「みんなが恐怖体験を語り合っている場面設定で、「僕」が学校の夜警をやっていた時の体験談が中心に書かれている。十月初めの風の強い日、「僕」はいつものように夜中三時の巡回業務を行っていた。何事もなく見回りを終えるかと思えたのだが、用務員室へ戻ろうと一階の長い廊下を歩いていた時、「僕」は不思議な体験をすることとなる。

テンポは速く、軽快で、読みやすい作品なのでぜひ読んでゾクゾクする「恐怖」体験を味わってもらいたい。

思えば、「鏡」は「怖い」イメージと結びついているように感じる。私は昔、合わせ鏡は縁起がわるいということを教えられ、それ以降合わせ鏡をなるべく避けて生活をしている。鏡と鏡を向かい合わせると、鏡の中に鏡が映ることになり、永遠に世界が続いているかのような不思議な感覚になる。友達から、合わせ鏡をすると鏡の世界に吸い込まれるといった迷信を聞いたことがあった。小学生のころはお風呂に入っている時に目の前の鏡に幽霊が映るのではないかと怖くてたまらなかつた記憶がある。皆さんはどうだっただろうか。なぜ鏡は「怖い」イメージと結びついたのであろうか。

「鏡」という言葉についても掘り下げて述べたい。この文章の執筆時期が正月頃であったのだが、鏡餅には「鏡」が使われている。正月行事はもともと神様をお迎えしてもてなし、お見送りするものである。鏡餅は神様の宿る場所であつたらしい。そして鏡開きをして餅を食べることにし、神様の運気を分け鏡に似ていること由来すると言われている。鏡は三種の神器の一つであり、神が宿るものとされるのも合点がいく。

次に「鏡」の漢字の成り立ちの方向から考えてみたい。諸説あるが、「常用字解」(白川静著)によると、「鏡」は「金」と「竟」に分けられる。「金」は金属に關係する偏で、昔の青銅という金属で作られた鏡に關係している。「竟」は「音」と「儿」(人)との組み合わせで、神のお告げと神に祈る人を表している。やはり漢字の成り立ちをみても、鏡は「神」につながるものがあるようだ。

以上のことから、先に挙げた鏡に対して恐怖を覚える事例は、鏡が「神」と密接に結びつくため、神秘的で畏れ多いイメージから派生して怖いイメージが生まれたのかもしれない。

私は漢字の語源について興味を持っている。先に「鏡」の語源について述べたが、漢字の一つ一つのパーツには意味や役割がある。漢字の原形は甲骨文字だ。甲骨文字は占いに使用されたもので、それを解明していくと、当時の人々の生活や考えがみえてくるのである。そういったところに私は魅力を感じる。「白川静さんに学ぶ 漢字は楽しい」(小山鉄郎著)は漢字の語源について楽しく分かりやすく学べるのでぜひ読んでもらいたい。

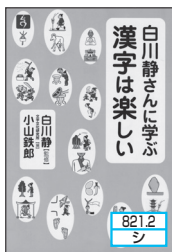
我々は言葉や文字を当たり前のように普段から使用しているため、単なる伝達媒体、あるいは事物の名称等としてしか捉えていない人が多い。しかし、語源を学ぶことによつて言葉や文字が血の通つた生き生きとしたものに感じられるようになるはずだ。

言葉や文字に限らず、日常生活の中には当たり前存在しているものがたくさんある。それらのものに改めて立ち止まって注目してみてもらいたい。すると、意外な発見があるかもしれない。そういった体験を高校生の皆さんには経験してもらいたいと思う。

そういえば、校舎二階の二号館と三号館の間の渡り廊下には、全身が映るような大きな鏡が設置されてあつたはずだが、いつの間にか撤去されてた。何か理由があるのだろうか？



『鏡』が収録されています。



このシリーズで「白川静さんに学ぶ漢字は怖い」も所載があります。

※このコーナーは、図書選定委員の先生方のリレー形式となっております。

としよかんニュース

先輩からの寄贈に感謝!

日大山高校友会から図書の寄贈があつた。毎年寄贈していただいております。昨年度で三二回を数える。寄贈していただいたのは、環境や言語など計六冊。この会は山新グループの本校卒業生の会で、会長は佐藤宏樹氏が務める。これまでに三十七四冊いただいております。これらは閲覧室内の専用書架に配架している。

在校生を思う先輩方の気持ちに感謝し、調べ物や学習に大いに利用させていただきたい。



感染予防対策バッチリ!

新型コロナウイルス感染予防に注意を払つての学校生活が続いているが、春から、館内で閲覧された本や雑誌、返却された蔵書を紫外線で除菌する除菌ボックスを設置した。閲覧室の学習机にはアクリル板も設置され、クリーンな環境を提供できるようになった。



令和4年度 日本大学山形高等学校芸術鑑賞会

岡本知高氏 ソプラニスタ・コンサート

令和4年6月24日(金)実施 会場：山形市民会館

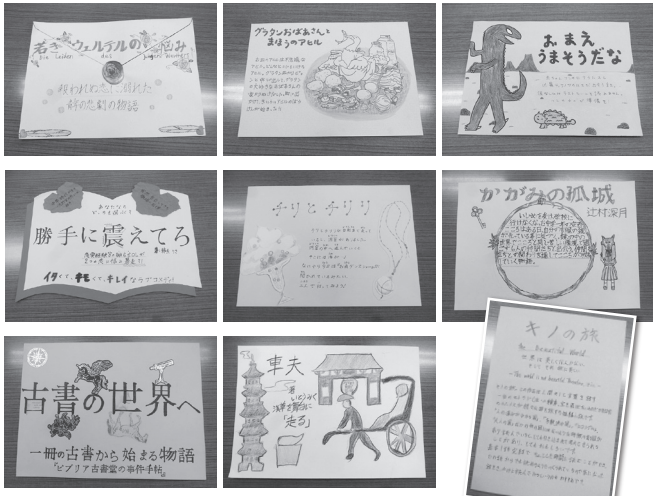
今年度の芸術鑑賞会は、「歌声がすごかった!」「(三年男子)」「校歌を歌ってくれたのが印象的」(三年男子)、「誰も寝てはならぬ」を時間をかけて練習したと聞いて感動した」(三年男子)、「見た目とのギャップというかそんなに出そうに見えないのにもすごく高い音が出ているのがすごい」(三年男子)、「高音なのに何を歌っているのかわかる」(二年女子)。「とにかくすごかったというのが伝わってくる。」

コンサートでは、「ふるさと」「もみじ」「誰も寝てはならぬ」(オペラ「トゥーランドット」より)「一期一会」(さだまさし氏)など、広いレパートリーで歌声を響かせ、さらには本校の校歌も披露された。様々な場面で自分でも歌っているこの校歌、時にはプロのパフォーマーによるものを聴く機会がこれまでもあったが、今回のものも味があった。充実した内容で魅力たっぷりなステージだった。なかなかない生のパフォーマンスにふれることのできる芸術鑑賞会を来年も楽しみにしたい。

あの有名な岡本知高氏によるコンサートだった。ソプラニスタとは、男性でありながら女性ソプラノの音域を持つ男性ソプラノ歌手のことである。令和三年八月の東京オリピック閉会式での熱唱が印象に残っているが、様々な舞台に立つ岡本氏はテレビなどでも言わずと知れた存在である。テレビのスポーツ中継などで岡本氏の国歌独唱を見たことがある人も多いだろう。岡本氏は、各地でのソロコンサートやオペラ、イベント出演等で会場を沸かせる一方、ライブワークとして取り組んでいるという学校訪問コンサートや公演先の地元学生らとのステージ共演に力を注ぐなど、音楽教師を目指していたという岡本氏ならではの子供たちとのふれあい活動も全国展開しているようだ。テレビでは見たことはいあるけど、と言う人はいても、なかなか生のコンサートに行く機会はなかっただろう。生徒達はとにかくそのすごさに衝撃を受けたようだ。生徒の声の一部を紹介すると、

令和4年度 図書館講座

～連携事業に参加しよう～



毎年実施する本校の図書館講座は、例年、幼稚園を訪れ園児たちに絵本の読み聞かせを行っていたが、コロナ禍が収束を見ないここの三年間は内容を大きく変更している。今年は図書館講座として、市立図書館と市内高校との連携事業に参加した。今年度春から行われているこの事業の秋の企画は、「私の推し本」の紹介。参加者は思い思いの本を選び、ポップ(本紹介のカード)を作る。各校で作られたポップを持ち寄り、市立図書館本館のショーケースにみんなで展示する。このような企画に本校から九人が参加した。十月二二日(土)、本校のほか四校が参加し、高校生同士の交流の中、展示作業が行われた。個性豊かな色とりどりのポップとともに様々な本が紹介されていて、ショーケースを見ているだけでも楽しんで、カードを作る楽しさや、交流かせに行きたくなってきたが、今年も様々な本の楽しみを体験できた講座だった。



十二月、この講座について、日本大学新聞からオンラインで取材を受けた第一四二九号令和四年十二月二十日発行に掲載された。

〈第一回〉五月～七月：テーマ「高校生になっても読みたい 大人にもおすすめの子童文学」。ポップづくり。本校図書委員会執行部(二、三年生) 六名参加ほか二校参加。

〈第二回〉九月～十一月：テーマ「私の推し本」。ポップづくり。本校は図書館講座として九名(一、二年生)参加。ほか四校参加。

〈第三回〉十二月～一月：大テーマ「冬」。年はじめの「本の福袋」(市立図書館で一般利用者に向けて貸出)。小テーマを自分で決める中に入れる本を三冊選ぶ。本校からは「意外と読んだことがないかもしれない名作」ほか二つ出品。本校図書館利用者二名参加。ほか二校参加。

山形市立図書館と
市内高校との
連携事業
この一年

多読クラス賞決定!

十二月十七日(土)、終業式に多読クラス賞の表彰が行われ、各学年一位のクラス図書委員が登壇し、学校長より賞状を受け取った。

受賞クラスの図書委員のコメント

◆一年生の部

七組：「多読クラス賞を受賞したことに驚いた。私はあまり本を読まないのですが、読書をしている友達を見るとすごいと思う。」

◆二年生の部

八組：「友達が読書をしている。私も少しずつ読書をしたい。」

◆三年生の部

五組：「二年連続で多読クラス賞を受賞できてすごい嬉しい。昼休みや放課後に、クラスの人が読書や学習で図書館を利用しているのを見かける。全体的に利用して嬉し。」

令和4年度 多読クラス賞

- ★1年生 (学年平均1.1冊)
 - 7組 3.2冊
 - 次点 6組 2.9冊
- ★2年生 (学年平均0.7冊)
 - 8組 2.3冊
 - 次点 9組 1.3冊
- ★3年生 (学年平均1.1冊)
 - 5組 3.2冊
 - 次点 6組 2.3冊

※令和4年4月～11月までの貸出冊数+各クラスの数で集計



1年7組



2年8組



3年5組

受賞おめでとう!

速報! ベストリーダー賞も決定!

今年度のベストリーダー三七名が決定した。入賞者には後日、賞状と副賞が渡される。入賞者に読書のきっかけを聞くと、「前から読書が好きだから」「SNSで紹介していた本が面白そうだったから」「友達がこの本読んでみて!と勧めてくれた」など、さまざまな声があった。今年度は三年生のうち三年連続入賞している生徒が六人で、上位に入った生徒は昨年度の約二倍、図書を借りている。その一方、一、三年生と二年生を比較すると、同じ順位で約半分の冊数となっているのが寂しいところだ。今年度入賞した人は来年度も入賞できるように、入賞を逃した人も次回こそは入賞を目指してほしい。図書館は皆さんの来館を楽しみにしている。

学年別の部

1年生の部

- ★1位 R・Eさん(93冊)
- ★2位 M・Yさん(67冊)
- ★3位 M・Kさん(42冊)

2年生の部

- ★1位 M・Iさん(46冊)
- ★2位 H・Tさん(44冊)
- ★3位 R・Hさん(22冊)

3年生の部

- ★1位 H・Kさん(91冊)
- ★2位 M・Sさん(82冊)
- ★3位 C・Kさん(40冊)

コース別の部

(コース別の部は学年別の部から選ばれた人が対象)

スポーツコースの部

◆該当者なし

進学コースの部

- ◆1位 K・Tさん(8冊)
- ◆2位 T・Sさん(6冊)
- A・Sさん

特進コースの部

- ◆1位 A・Iさん
- W・Kさん(7冊)
- N・Yさん
- ◆4位 R・Mさん(6冊)

※各部門とも、令和4年4月～令和5年1月までの個人の総貸出冊数で集計

私の一冊

『謎解きはデイナーのあとで』

私はミステリー小説が好きです。その中でも好きな本は『謎解きはデイナーのあとで』です。この本は二〇一一年本屋大賞を受賞し、シリーズ累計発行部数四二〇万部と絶大な人気を誇っており、更にドラマや映画化もされています。

この本の魅力は二つあります。一つ目はヒロインの宝生麗子と主人公であり麗子の執事でもある影山との関わり合いです。麗子の暴言に対する発言が、読んでいる人に笑いを届けてくれます。二つ目は影山の推理力です。影山の推理が物語の醍醐味になっているので、知らない人でもわかりやすく楽しめます。

シリーズも三巻あり、新巻も始まっています。一巻を読んだらその後も楽しめる作品になっているので、是非読んでみてください。

東川 篤哉 著



『変な家』

今回私が紹介する本は、WebライターやYouTuberとして有名な雨穴さんの『変な家』です。「家に謎の空間がある」という知人の相談から、この作品は始まります。家の間取りを詳しく調べていくと、二重の扉や窓のない子供部屋など、不可解な点が見つかってきます。そこから、この家は殺人のために作られた家なのではないかと考えられていきます。

この作品のおもしろいところは、幽霊や怪異現象のような怖さではなく、人間の念や呪いの気持ち悪さや恐怖を感じられるところです。本文は二、三人の会話と家の間取り図で書かれているので、読みやすい作品となっています。気になったら、ぜひ学校の図書館で借りて読んでみてください。

雨 穴 著



『傾物語』

『傾物語』は西尾維新による青春怪異小説(物語シリーズ)第五弾。日本の田舎町を舞台とした、主人公・阿良々木暦と彼に出会った者達の「怪異」に関わる不思議な物語。怪異が出現した原因を探り、謎を解いて事件を解決するというのが本作のストーリーであるが、コメディ要素を強く押し出している。漫才の様なギャグシーンが十ページに渡って続くこともさらにはなく、謎解き以上にページが割かれている。

八月二十日の夏休みの最終日、阿良々木暦は受験勉強ばかりしていて、夏休みの宿題を何一つやっていないのに、明日が始業式である事に気付く。そこで軽い気持ちで吸血鬼の忍野忍の力を借り、一日前の過去へタイムスリップする二人。しかしそこは十一年前の世界だった。世界が終わりかけた世界を救ったりする物語。

西尾 維新 著



三年七組 仲野 恭兵

図書委員会活動報告

活動目標 ● 本に興味を持ってもらえるような環境づくり キャッチフレーズ ● 新たな本と新たな自分



図書委員会での活動
前期委員長 三年五組 金野 光留

今年「本を手に取りやすい環境を作る」という目標を達成するために、委員会一丸となって様々な活動に取り組めた年だったと思います。

活動の中でも特に印象に残っているのは桜華祭です。コロナにより古本市が行えないため、今年は来館した人におりの作成体験をしてもらい、また本校を訪れた張本智和選手の特集コーナーを設けました。最初は各クラスの企画で忙しい中、人数が集まってくれるか心配でしたが、多くの委員が参加してくれました。おかげで当日来館した人にも、楽しんでもらうことができました。

桜華祭以外の活動でも、先生方や委員の皆さんが支えてくれたお陰で成功させることができました。今まで本当にありがとうございました。

本について



後期委員長 二年五組 工藤 隼瑛

後期から図書委員長になった工藤隼瑛です。

今、図書館の利用者数は多いですが、本を借りる人は少ないのが現状です。私のクラスでは、平均の貸し出し冊数が〇・五冊でした。このことから、本に興味がないことがわかります。だからこそ、多くの人が本に興味を持ってもらえるように、私自身が図書館を宣伝していきたいです。

また、学校全体が本に興味を持ち、好きな本に巡り合えたら良いなと思っています。本と私たちは知らない間に密接しています。例として、小説が原作となっている映画やドラマがあります。本が苦手と思っている人も、映画きっかけで本を好きになって欲しいと思います。

最後に、本に対してマイナスな先入観に囚われずに、一度は図書館に来て、本を借りてみてください。

令和4年度 図書委員会

月～土曜日の6つの班があり、A(読書推進)、B(資料装備)、C(広報データ)の3グループに分かれています。執行部を中心に利用しやすい図書館を目指し、日々活動しています。

1年生 1組 原田 森 2組 鈴木夏央瑠(前) 3組 武田龍之介 4組 丸一 奈和 5組 安孫子一楓(前) 6組 庄司 奈桜 7組 小川 悠仁(前) 8組 植松 義人(前) 9組 原谷 祐希(後)	2年生 1組 金村 旭朗(前) 2組 羽柴 蓮(後) 3組 杉浦 暖人(前) 4組 高橋 学士(後) 5組 青木 環奈 6組 遠藤竜之介 7組 石川 桜 8組 阿曾 結梅(前) 9組 五十嵐 嶺(後)	3年生 1組 鈴木 煌大 2組 國分 羽流 3組 木村 奏音 4組 石山明日香 5組 金野 光留 6組 伊藤 美咲 7組 児玉 旭 8組 高橋 洗気 9組 秋元 優太 10組 川俣 知央	1年生 1組 原田 森 2組 武田龍之介 3組 丸一 奈和 4組 安孫子一楓(前) 5組 庄司 奈桜 6組 小川 悠仁(前) 7組 植松 義人(前) 8組 原谷 祐希(後)	2年生 1組 金村 旭朗(前) 2組 羽柴 蓮(後) 3組 杉浦 暖人(前) 4組 高橋 学士(後) 5組 青木 環奈 6組 遠藤竜之介 7組 石川 桜 8組 阿曾 結梅(前) 9組 五十嵐 嶺(後)	3年生 1組 鈴木 煌大 2組 國分 羽流 3組 木村 奏音 4組 石山明日香 5組 金野 光留 6組 伊藤 美咲 7組 児玉 旭 8組 高橋 洗気 9組 秋元 優太 10組 川俣 知央	前期執行部 委員長 3年5組 金野 光留 副委員長 3年5組 小出 浩輔 グループリーダー A 3年8組 三浦 雄真 B 3年10組 川俣 知央 C 3年8組 高橋 洗気 2年生代表 2年5組 工藤 隼瑛	後期執行部 委員長 2年5組 工藤 隼瑛 副委員長 2年5組 柏倉 将人 グループリーダー A 2年4組 奥山 大翔 B 2年9組 渡邊 春菜 C 2年8組 佐久間あすか 1年生代表 1年4組 庄司 奈桜
--	--	--	---	--	--	---	---



後期執行部です。本の魅力を伝えていきます！

※(前)：前期のみ

(後)：後期のみ



ライブラリーフォト

～図書館・図書委員の1年～

4月 前期第1回委員会



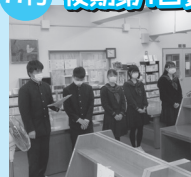
8月 蔵書点検



桜華祭



11月 後期第1回委員会



図書選定



6月 雑誌リサイクル



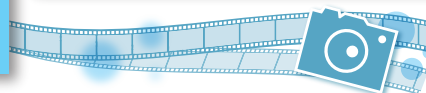
図書選定



10月 県高教研村山支部 図書委員研修会



12月 雑誌リサイクル



年間図書貸出ベスト10

書名	著者名	請求番号
1位 『傷物語』	西尾 維新	913.6 ニ
2位 『オルタネート』	加藤シゲアキ	913.6 カ
3位 『星を掬う』	町田 そのこ	913.6 マ
4位 『探偵はもう、死んでいる。』	二語 十	913.6 ニ
5位 『ないものねだりの君に光の花束を』	汐見 夏衛	913.6 シ
6位 『正欲』	朝井 リョウ	913.6 ア
7位 『親愛なるあなたへ』	カンザキイオリ	913.6 カ
8位 『六人の嘘つきな大学生』	浅倉 秋成	913.6 ア
9位 『薬屋のひとりごと』	日向 夏	913.6 ヒ
10位 『スマホ脳』	アンデシュ・ハンセン	491.3 ハ

令和5年1月31日現在

今年度は、本屋大賞にノミネートされた本や、リクエストで購入した本が多く読まれました。特に、昨年度第1位だった加藤シゲアキ氏の『オルタネート』は今年度も第2位になり、まだまだ多くの人気を集めているのだなと思いました。また、加藤シゲアキ氏は、男性アイドルグループのメンバーでもあり、そのグループを好きな人が、この本を借りたりしているのではないかと思います。

他にも、西尾維新氏や町田そのこ氏、汐見夏衛氏の昨年度ランクインした著者の本が今年度もランクインする結果となりました。

図書館には他にも多くの幅広いジャンルの本があるので、少しでも本に興味のある人は一度訪れてみてはいかがでしょうか。これからもたくさん本を読んでいきましょう。

(2年 奥山 大翔)

編集後記

3頁の記事でもふれたが、子どもとの「読み聞かせ」の講座が、ここ最近コロナ禍でできずにいる。その読み聞かせにまつわる興味深い話を新聞記事で見かけた(1月14日 読売新聞)。「読書犬」という犬がいるそうだ。本を読む犬。正確には読み聞かせを聞いてくれる犬だ。アニマルセラピーの一種で、ダメ出しがないので、読んだ人は自信がつくという効果がある。犬は内容は理解していないはずだが、いつか本の内容を味わう犬なんてのも出てきたらおもしろいかも、などと現実逃避な思いを持ってしまう。犬はまだしもAIなら可能か。本校の読み聞かせは幼稚園を実際に訪問する。そろそろ復活できるだろうか。(小山)